

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520574

研究課題名(和文) 漢字教育におけるグループ学習 - 学習効果の検証と教材の開発 -

研究課題名(英文) Group Work in Kanji Education: the Examination of Learning Effect and the Development of Kanji Learning Materials

研究代表者

濱田 美和 (HAMADA, Miwa)

富山大学・国際交流センター・教授

研究者番号：20283054

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の最終目標は、教師が傍らについていなくても、日本語学習者同士で効果的にグループ練習が行えるような、漢字学習教材を開発することである。本研究では、グループ練習中の学習者間のやりとり、および、学習者の習得状況を観察することによって、活動を活性化させるために何が必要か、そして、グループ練習でどのような学習効果が見られるのかを調べた。その結果、特に漢字の読みや意味において、学習者同士で知識を共有したり、相手の反応から自身の間違いに気づいたりといったグループ練習の利点を確認された。

研究成果の概要(英文)：The primary objective of this study is to develop Kanji learning materials that will let learners of Japanese execute group work effectively without a teacher looking on. Through observation of the dialogues between learners during group work and factoring in the acquisition situation of each learner, we researched what factors are required to activate the group work and what effects the group work would have on Kanji learning. As a result, we saw the benefits of group work; learners could share their knowledge and could notice their mistakes through other learner's reactions especially about the reading and the meaning of Kanji.

研究分野：日本語教育

キーワード：漢字学習 日本語学習者 中・上級 グループ練習 教材開発

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 漢字クラスでの複式授業

コース運営の効率化などの理由により、複数レベルの学習者が1クラスに混在するという状況は珍しくない。本研究を始めたころは、勤務校の日本語プログラムにおいても、中・上級向けの漢字の授業は学期中に週1クラス(90分授業)しか開講されていない状況だった。そのため、学習者間のレベル差が大きく、習得状況別に複数の教科書を使って授業を行わなければならない状況にあった。具体的には、使用教科書別に学習者を2~4グループに分け、各グループに対して、30分程度教師主導の指導を行い、あとの1時間は学習者が1人で練習問題を解くという、複式授業を行っていた。しかし、30分では十分な指導が行えない、また、1人ではうまく練習できない学習者がいるなどの問題があった。

### (2) グループ練習用タスクの開発

(1)で述べた複式授業における問題点を改善するための試みの1つとして、教師がそばについてなくても、学習者同士がグループで練習できるようなタスクの開発に、2008年度に着手した。そして、2009年度から、開発したタスクを実際に教室で使用したところ、同じグループの学習者同士で協力し合い、楽しそうにタスクに取り組んでいる様子が見られた。さらに、学期末に学習者を対象に行ったアンケート調査では、グループ練習に対する肯定的なコメントが多く寄せられた。

このように、漢字クラスにおけるグループ練習の導入は、授業の活性化に一役買っているように見受けられたが、新たな取り組みのため、個々のタスクに関する検証はまだ十分に行うことができていなかった。よりグループ練習を充実したものとするためには、練習活動を活性化させるために必要な要素は何か、個々のタスクがどのような点で漢字学習に効果をもたらしているのか、また、授業内容に応じてどのようにタスクを使い分けるのが効果的なのか、これらに関する検討が必要だと考えるに至った。

## 2. 研究の目的

本研究の最終目標は、日本語学習者同士で効果的に練習活動が行えるような、漢字学習教材を開発することである。上で詳しく述べたが、本研究を始める前に、日本語力が中・上級レベルの学習者を対象に、複式で授業を行っている漢字クラスにおいて、学習者個人あるいは学習者同士で行える様々な教材の作成を試みた。本研究では、この中の学習者同士で行うグループ練習用教材に焦点を当て、次の2点を目的に研究を行った。1つは、学習者間のやりとりの様子および学習者の習得状況を観察することによって、活動を活性化させるために何が必要か、そして、グループ練習でどのような学習効果が見られるのかを明らかにすること、もう1つは、これ

らの分析結果をもとに、より効果的にグループ練習ができるような教材の開発を行うことである。

## 3. 研究の方法

### (1) 調査の概要

本研究では、これまでに作成したグループ練習用タスク(高畠・濱田 2010)をもとに、以下の調査を行った。

調査1: グループ練習中の学習者の様子を、録音・録画し、特に学習者間でのやりとりを見るために音声データを文字化し、分析する。

調査2: グループ練習に参加した学習者を対象に学期末にグループ練習に関するアンケート、インタビュー調査を行い、分析する。

グループ練習用タスクは、勤務校の漢字クラスで使用している教科書『漢字 1000plus INTERMEDIATE KANJI BOOK』vol. 1、vol. 2(凡人社)に沿って、教師が導入した漢字・漢字語の定着を図ることを目的として作成したものである。1つのグループの構成員は2~3人で、学習者の1人が問題やヒントを出して他の学習者が答えるタイプの練習と、学習者同士で相談・協力しながら答えを考えるタイプの練習がある。

### (2) 収集データ

調査1、2ともに、本研究期間の2012年度~2014年度までの3年間、継続してデータの収集を行ったが、本研究において分析の対象としたのは、2012年度前期から2013年度前期までのデータである。グループ練習を行った漢字クラスは、日本の大学で学ぶ外国人留学生を対象としたクラスである。日本語能力試験N3レベル(『漢字 1000plus INTERMEDIATE KANJI BOOK』vol. 1を教科書として使用)の6人の学習者(韓国2人、ベトナム2人、ロシア2人)と、N2レベル(『漢字 1000plus INTERMEDIATE KANJI BOOK』vol. 2を教科書として使用)の11人の学習者(中国4人、ロシア4人、韓国2人、ブラジル1人)を対象に、延べ36のグループ練習中の発話を録音(N3レベルが計5時間36分、N2レベルが計8時間48分)・文字化したデータを分析した。そして、学期末に、同じ学習者に対して、グループ練習に関するアンケート、インタビュー調査を実施した。

## 4. 研究成果

### (1) グループ練習の効果

データを分析した結果、学習者間のやりとりには、教材に沿って出題・解答したり、互いに考えた解答を確認し合ったりするほかに、相手に発言内容を確認したり、自分が知らない漢字の読みや意味を相手に質問することによって生じるやりとりも見られた。このように、特に漢字の読みや意味において、

学習者同士で知識を共有したり、相手の反応から自身の間違いに気づいたりといったグループ練習の利点が確認された。

## (2) 学習者間での質問、間違いへの指摘

より詳しく見ていくために、学習者間でどのような質問がなされ、また、どのような間違いに対して指摘がなされているか、そして、それらについてどの程度適切に修正がなされているのかを調べた。

### 学習者間での質問

グループ練習中の質問の発話には、練習方法にかかわる質問、出題内容にかかわる質問、解答にかかわる質問、漢字・漢字語にかかわる質問の4つが見られた。

N3レベルの学習者のグループ(以下、「N3グループ」)では、質問の発話については大半が同じグループのメンバーから適切に返答がなされていたが、漢字・漢字語の読みについては、メンバーから間違った答えを与えられている場合があった。そして、漢字・漢字語の意味については、質問してもメンバーからの返答がないままのものが複数見られた。ここで再度質問しなかったのは、意味については自身で教科書や電子辞書で調べやすいことも影響していると思われる。また、グループ練習を一通り終えた後で、同じ質問を教師に対して行っている学習者もいた。

N2レベルの学習者のグループ(以下、「N2グループ」)では、多くが適切に返答がなされていたが、解答にかかわる質問をはじめ、漢字・漢字語にかかわる質問、練習方法にかかわる質問それぞれで、学習者同士では解決できていないものが一定数あった。N2グループで特徴的なのは、解答にかかわる質問のうち自分の考えた解答が正しいかどうかを確認する発話が半数を占めており、N3グループに比べてかなり多かったことである。大半は学習者同士で適切に確認がなされていたが、中には正解かどうか確認されないままのものもあった。N2グループでは解答を練習終了後にまとめて確認するタイプの教材が多いのに対して、N3グループでは設問ごとに解答を確認できるタイプの教材が多く、このことが両者の違いに結びついたものと思われる。次に、漢字・漢字語にかかわる質問で、メンバーから間違った答えを与えられたり返答がなかったものが複数見られたのは、N3グループと同様に、読みと意味についての質問だった。N2、N3グループあわせて、漢字・漢字語にかかわる質問の8割を読みと意味にかかわる質問が占めており、質問数自体の多さも修正なしの件数が他と比べて多いことと関係していると思われる。最後に、練習方法にかかわる質問で適切な返答がなされなかったものは、手順が複雑な練習におけるものであった。

### 学習者間での間違いへの指摘

間違いの発話は、練習方法にかかわる間違い、漢字・漢字語にかかわる間違い、文法にかかわる間違いの3つに大きく分けられる。

N3グループでは、間違いの発話については全体的に同じグループのメンバーからの指摘や教材で提示された解答によって間違いに気づき訂正できていたものが多かったが、読み間違いについては学習者同士のやりとりの中では間違いに気づかないままのものも多かった。また、実際には存在しない語を作ったり、意味的に共起しない語を用いたりする間違いはいずれも学習者自身で例文や設問を作成するタイプの練習で見られたが、これらについては学習者同士で間違いを指摘している例は見られなかった。

N2グループでは、N3グループと異なり、全体的に学習者同士のやりとりの中では修正されないままのもの多かった。この理由の1つとして、N3グループよりも難易度の高い漢字・漢字語が練習で取り上げられていて、教材に出現する漢字・漢字語の数も多くなるため、間違いに気づきにくいことが考えられる。中でも特に修正なしが多く見られたのが読み間違いで、N3グループと同様、学習者同士のやりとりの中では間違いに気づかないままのもの多かった。次に修正なしが多かった意味の間違い、それから意味的に共起しない語を使った間違いについては、学習者自身が作成した例文の中で、語を異なる意味で用いたり意味的に共起しない語を用いたりしたものだった。そして、実際には存在しない語を作った間違い、用法の間違いについては、練習終了後まで正答を確認できないタイプの教材で、間違いに気づかないまま練習を進めていったものだった。

### 教材開発への示唆

で述べたように、質問の発話については、N3、N2グループともにメンバーから適切に返答がなされているものが大半を占めたが、間違いの発話については間違いに気づかないままのものや返答がなされていないものが増え、特にN2グループでは修正ありよりも修正なしのほうが多かった。中でも修正なしが目立ったのが、漢字・漢字語の読みである。修正なしのままとなるのは、特に清音と濁音、長音と清音などの類似音で、一般的に日本語学習者が区別を苦手とするもの、そして、グループ練習を進める上での重要性が低い語の場合が多かった。

そこで、今後教材開発を進める上で考慮すべき点として、修正なしの漢字・漢字語の読みについて、教材を工夫することによりグループ練習の中で修正が可能なものと、学習者同士では修正が困難なものに分別する必要がある。そして、後者については教師が導入・練習する際に注意して取り上げるよう、指導法および教材を改めていく必要がある。また、漢字・漢字語の読み以外に多く見られた、練習方法、自分の考えた解答の確認、お

よび、漢字語の意味、意味的共起性にかかわる間違いへの対応は、教材で取り上げる内容を変更したり解答の提示方法を変更するなどして、本研究期間中に教材の改訂を行った。

### (3) 学習者同士で円滑に進めるための方法

さらに、学習者同士のやりとりから、どのような練習において活動が円滑に進まなかったか、そして、グループ練習を行った学習者へのアンケート、インタビューをもとに、学習者がどのような点で困難を感じたかを調べた。

#### 学習者同士でのやりとりから

学習者同士で出題・解答する形式のグループ練習においては、不適切・不自然な内容のクイズ・例文作成が問題となっている練習が多かった。中には、別の語を用いるべき例文を作って出題してしまい、そのため出題・解答が円滑に行われていない場合もあった。これ以外には、解答を口頭で伝えることによる助詞の言い間違えがあった。

学習者全員で解答を求める形式のグループ練習においては、グループの学習者全員が答えがわからずになかなか進められなかったものが多かった。学習者らがばやく様子も度々見られた。また、例文を音読するという指示に従わずに、文の番号を読み上げながら活動を進行しているものも多く見られた。このほかには、練習がかなり進んだ段階でようやく最初のほうで作った熟語の間違いに気づいてやり直すことになったものや、熟語の微妙な使い分けに関する知識が必要とされるような、このレベルの学習者にとっては難易度の高すぎるものもあった。

#### アンケート、インタビュー調査から

学期末に実施したグループ練習に参加した学習者へのアンケート、インタビュー調査のうち、練習の行い方、時間、練習内容の改善にかかわるコメントを分析した。その結果、練習の行い方については、教師や TA の説明があればすぐに理解できる内容であっても、学習者だけで指示文を読み理解するのはハードルが高いことがわかった。練習時間については、20分～30分ぐらいが適当だと考える学習者が多かった。練習内容については、カードを組み合わせて漢字や熟語を作る練習に対するコメントが多かった。時間がかかりすぎる、役に立つが難しいといったコメントに加え、カードの多さやカードを広げるスペースの確保の難しさを挙げる学習者も多かった。

#### 教材開発への示唆

から、学習者のみで活動を進めるには、指示文も設問もより簡潔に、見やすく提示し、カードの種類や枚数も制限し、解答の確認も学習者自身で間違えた箇所を把握しやすいようにするといった教材の工夫が求められ

ることがわかった。そこで、タブレット端末を教材の一部に組むことにした。この結果、以前よりも円滑に活動を進められるようになり、教材の改善へとつなげることができた。

### (4) 今後の展望

本研究では、特に漢字の読みや意味において、学習者同士で知識を共有したり、相手の反応から自身の間違いに気付いたりといったグループ練習での学習効果が確認された。そこで、今後の研究計画として、次の2点を中心に進めたいと考えている。1つは、漢字の読みに注目し、グループ練習の中で習得可能な学習項目と、学習者だけでは習得が困難な学習項目とを分別すること、もう1つは、グループ練習教材としてタブレット端末、ワークシート、カード教材を使用しているが、練習内容に応じて各ツールをどのように組み合わせるのが適切かを検討することである。そして、これらの結果をもとに、より効果的なグループ練習を行えるような教材の開発へとつなげたい。

#### <引用文献>

高島 智美、瀧田 美和、複数レベルの学習者を対象とした漢字クラスの授業改善及び教材開発 学習者の学びの活性化のための試み、富山大学留学生センター紀要、第9号、2010、9-18

### 5. 主な発表論文等

#### 〔雑誌論文〕(計3件)

瀧田 美和、高島 智美、漢字クラスにおけるグループ練習時の学習者同士のやりとりの分析 どのような質問、間違いの指摘がなされているか、富山大学国際交流センター紀要、創刊号、2014、3-11

瀧田 美和、高島 智美、グループ練習におけるタブレット端末の活用 日本語学習者向け漢字教材の改良とその効果、CIEC 研究会報告集、査読有、5巻、2013、46-51

瀧田 美和、高島 智美、漢字学習のためのグループ練習用教材の開発 日本語学習者同士で円滑に学習活動を行うための方法を探る、富山大学留学生センター紀要、第12号、2013、1-8

#### 〔学会発表〕(計3件)

瀧田 美和、高島 智美、漢字クラスにおけるグループ練習時の学習者同士のやりとりの分析 漢字の読みに注目して、CAJLE2014(於、カナダ・ケベック州 モントリオール Best Western Ville-Marie Hotel & Suites)、Proceedings、2014、21-26

濱田 美和、高畠 智美、複式漢字クラス  
におけるグループ練習の有効性、2013  
年度日本語教育学会秋季大会(於、関西  
外国語大学)、予稿集、2013、377-378

濱田 美和、高畠 智美、楊 峰、中国人  
学習者向け漢字教材の開発 日中同形  
の漢語形容詞、第39回日本語教育方  
法研究会(於、石川県政記念しいのき迎  
賓館)、日本語教育方法研究会誌、Vol.19  
No.2、2012、32-33

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

濱田 美和 (HAMADA, Miwa)  
富山大学・国際交流センター・教授  
研究者番号：20283054

### (2) 研究協力者

高畠 智美 (TAKABATAKE, Tomomi)  
トヤマ・ヤポニカ・講師、  
富山大学・国際交流センター・非常勤講師